

博士論文（要約）

現代中国語における文末助詞“了”の意味機能

——アスペクト論の観点から——

毛 興華

本論文は、中国語の文末助詞“了”（以降は **le2**）の意味機能と使用条件を研究対象とし、一般アスペクト論の枠組みにおいて考察した。全体的な内容として、まず **le2** の中心的な意味機能について＜パーフェクト＞形式と記述する妥当性を検証した。その上、**le2** が用いられる基本構文 **SVOle** の成否条件、**le2** の＜状態パーフェクト＞用法、そして「数量表現」を伴う **le2** 文の意味機能について分析した。これらの考察を通して、**le2** の意味機能の全貌と、アスペクト体系における位置付けを明らかにした。各章の主な内容は以下のようである。

第 1～4 章は本論文の主要論点を展開するための準備で、具体的な内容は以下のようである。

第 1 章では、本論文の全体的な問題意識を提示し、一般アスペクト論の枠組みを紹介した。

第 2 章では、**le2** と同音異形態の **le1** の文法的意味及び **le2** との違いについて議論した。

第 3 章では、**le2** に関する主要な先行研究と問題点を述べた。

第 4 章では、語彙的アスペクトを主な基準として、中国語の動詞を分類した。

第 1～4 章の議論を踏まえた上で、第 5 章では **le2** の中心的な意味機能について、「ある先行事態の発生に伴う結果・効力が、後続の参照時に存続している」ことを表す＜パーフェクト＞形式であることを主張した。その上、通言語的アスペクト論における＜パーフェクト＞の重要な特徴の有無と現れ方を観察し、この記述の妥当性を検証した。結論として、**le2** は日英語の＜パーフェクト＞形式に比べ、「時間付加詞との結合能力」「結合する述語の種類」「先行事態のアスペクト」「ムード的用法の発達」「地の文における生起能力」などにおいて違いがあるが、＜参照時の存在＞＜結果・効力の存続＞＜事態発生の先行性＞＜後退性＞という、＜パーフェクト＞の中心的な意味機能を全て具え、＜パーフェクト＞形式と記述することは妥当であると考えられる。

第 6 章では、これまでの議論を踏えながら、**le2** を伴う基本文型の **SVOle** 形式に焦点を当て、「ヴォイス」と「アスペクト」の相関性からその成否条件について考察した。主な結論として、「ヴォイス」的に無標の **SVOle** 形式は、（複合）動詞の語彙的意味における「主体 **S** の結果」を捉えることができるが、基本的には「客体 **O** の結果」を捉えられない。**le2** は動詞の語彙的意味における「客体結果」を捉えるためには、「ヴォイス」的に有標の「受動文」や「“把”構文」を媒介にしなければならない。また、主体と客体のどちらの結果にも直接的に言及しない「補文関係」の **VR** 構造や「再帰構造」が述語に用いられる時、無標の **SVO** と有標構文との「ヴォイス」上の対立が中和され、**le2** がどの構文においても比較的に自由に使用されるようになる。第 6 章の全体的な分析結果は、以下の図（1）にまとめることができる。

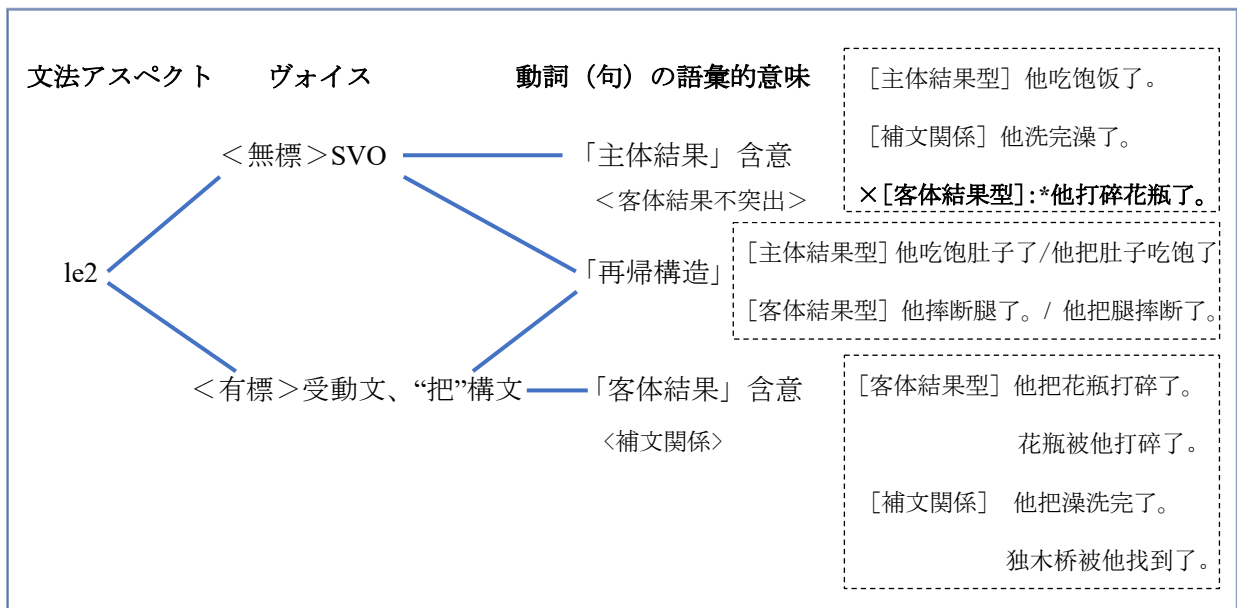


図1 「ヴォイス」と「アスペクト」との相関性から観る le2 文の成否条件

第7章では、第5章の結論を踏まえた上で、le2 には結合する述語形式の「語彙的・必然的結果」のみ直接的に捉え表す単純視点アスペクトの＜状態パーフェクト＞用法があることを指摘した。そして、＜状態パーフェクト＞用法の le2 は、「発話時状況」に関連づけて先行運動の結果・効力を「推定」しないため、ムード的意味との絡みがなく、命題の内側にも入ることができる。また、この用法の le2 文は「先行運動」の側面を背景化し、「結果状態」の存続のみを捉え表すので、「継続相 (imperfective)」の視点アスペクトを呈する。le2 の＜状態パーフェクト＞用法の特徴は、以下の表 (1) にまとめることができる。

表1. le2の<状態パーフェクト>用法の特徴（<動作パーフェクト>との違いを兼ねて）

	（動作）パーフェクト	状態パーフェクト
結合する動詞の 語彙的アスペクト	全運動動詞 (語彙の意味から解放)	変化動詞（状態動詞） *非内の限界動詞：開始限界達成性
結果の種類	語彙的・必然的結果 推定的・非必然的効力	語彙的・必然的結果
ムード的意味	あり (非必然的効力の推定)	なし
参照時（発話時） 状況との関連性	義務的	非義務的
視点アスペクト	<複合的視点> 先行運動完成＋結果存続	<単純視点（継続相）> 結果状態の存続
タクシス	一時的後退性	同時性
関連する言語現象	—	「假定従属節」に現出可能 「連体修飾節」に現出可能 「現在時を表す時間詞」と共起可能

また、「結果状態」のみを捉え表す<状態パーフェクト>用法の le2、「先行運動」のみを限界づけた視点で捉え表す<完成相>の le1、その両方を複合的な視点で捉える<（動作）パーフェクト>の le2、三者の意味機能は異なりながらも連続しており、中国語における已然事態を述べる主要な文法要素として、「運動」と「結果」のどちらの側面に重きを置くかということによって、相補分布的な「意味—形式」の対応関係を構成している。三者の関係性は、以下のよう図(2)で表示することができる。

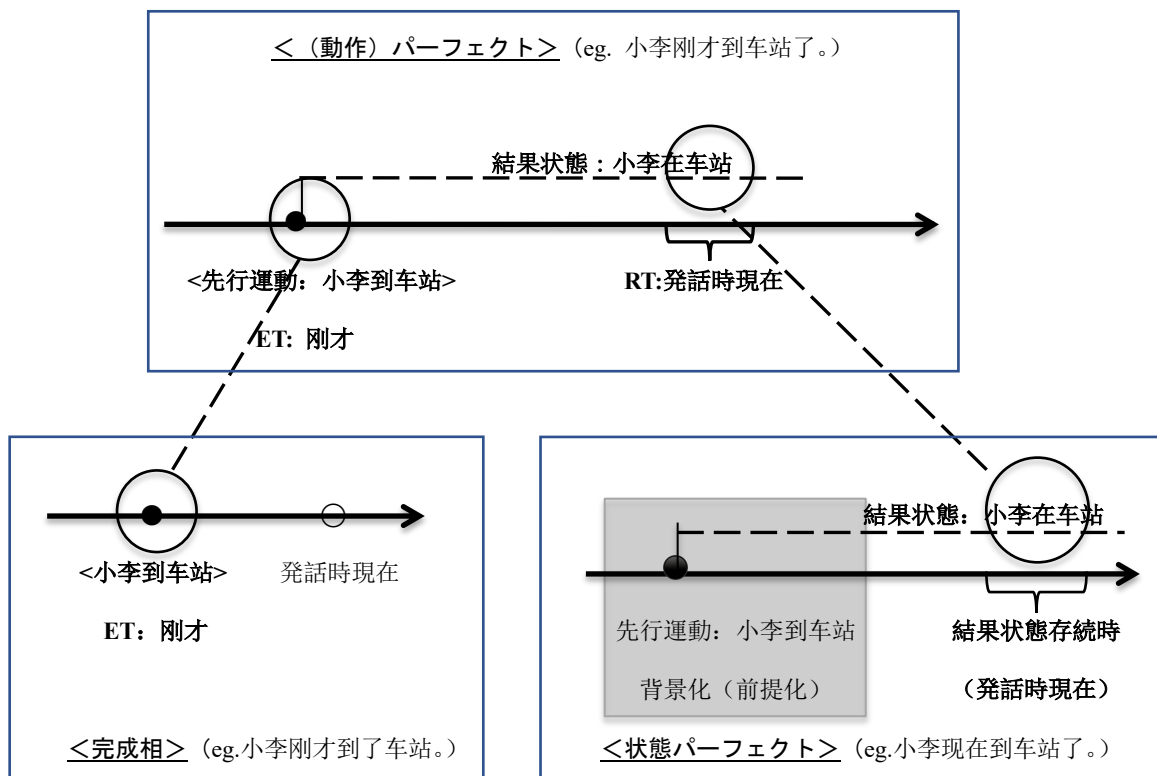


図2 ＜完成相（perfective）＞、＜状態パーフェクト＞、＜動作パーフェクト＞の関係性

第8章では、「数量表現」を伴う *le2* 文にまつわる現象を考察した。主な結論として、まず「S + V + 数量表現 + O + *le2*」形式には、「数量表現」が変化後の量を表す＜状態動詞＞に相当し、文全体の述語としてはたらく＜状態パーフェクト＞用法があると述べた。そして、「数量表現」を伴う *le2* 文における「大量・充足義」の発生メカニズムについて、「運動に関連する事物などの数量が話者の干渉（発話行為）なしでは増加・減少し続ける」という認識に動機づけられていると主張した。最後に、「時量補語」を伴う *SVOTle* 形式について、「非内的限界動詞」による＜反復性運動＞を意味する動詞句が述語に用いられる時、*le2* と「数量表現」の組み合わせで生じた「長時間」の語用論的含意に動機づけられ、＜属性叙述＞を表すことができると述べた。

終章では、語用論的・認知的視点から、*SVOle* 形式のヴォイスに関わる制約の動機づけと、*SVOle* 形式の情報構造について考察した。これらの分析を通して、アスペクト研究における語用論的・認知的アプローチの可能性を示唆した。最後に、今後の課題を提示した。

本研究を通じて、中国語における文末助詞“了”の意味機能とそれに関連する諸現象の全体像、及び中国語のアスペクト体系における文末助詞“了”の位置付けを明らかにした。

本研究の構成は次のとおりである。

第1章 序論

第1節 現代中国語における“了”の下位分類と本稿の研究対象

第2節 アスペクト論の基本的な枠組み

2.1 文法的アスペクト（視点アスペクト）

2.2 語彙的アスペクト（aktionsart / 事象タイプ）

2.3 フェイズ

2.4 <アスペクチュアリティー>の階層性

第3節 本論文の基本構成

第4節 用例、言語資料などについて

第2章 le1 の意味機能について

第1節 <le1, le2 同一説>について

1.1 <le1, le2 同一説>①——<実現説>について

1.2 <le1, le2 同一説>②——<限界達成説>について

第2節 le1 のテンポラリティーから見る<完成相説>の妥当性

2.1 le1 の<内部時間参照>機能と<完成相>の連動性

2.2 <地の文>における le1

第3章 文末助詞 le2 に関する主な先行研究

第1節 <新事態の出現>説について

第2節 <変化の既実現>説について

第3節 <参照時関連状態（パーフェクト相）>説について

3.1 <パーフェクト相>について

3.2 <参照時関連状態>説

第4節 le2 の<ムード的用法>と<参照時関連状態>説の問題点

第5節 まとめ

第4章 中国語の＜語彙的アスペクト＞ —— 動詞分類を中心に

第1節 先行研究と本稿の分類基準

1.1 <語彙的アスペクト>に関わる三つの意味素性と中国語動詞分類の先行研究

1.2 本稿の分類基準

第2節 中国語の動詞分類

2.1 <A.静態動詞>

2.2 <B.変化動詞>

2.3 <C.所有動詞（主体付随状態）>

2.4 <D.存在様態動詞>

2.5 <E.主体運動動詞（非内的限界動詞）>

2.6 <その他>

2.6.1 <F.内的感情動詞>

2.6.2 <G.外部現象動詞>

第3節. まとめ

第5章 文末助詞 le2 の意味機能と使用条件——アスペクト論の観点から

第1節 <参照時の存在> —— 副詞“就”との共起から

第2節 <結果・効力の存続>について

2.1 le2 文における<結果・効力>の種類

2.2 「新事態出現の報告」における<結果・効力>の存在

2.3 付加詞との共起から見る le2 文における先行運動の<結果・効力>

2.3.1 le2 と「時間の付加詞」との共起

2.3.2 le2 と「場所の付加詞」との共起

2.3.3 le2 と「手段の付加詞」の共起

2.3.4 本節のまとめ

第3節 <事態発生の先行性>について

3.1 現実領域の已然事態を表さない le2 文

3.2 le2 文における先行運動の<完成性>について

3.3 le2 文における「状態性述語形式」の<完成性>

3.4 本節のまとめ —— 「VP+le1+NP+le2」形式の成立条件を兼ねて

第4節 le2 の＜一時的後退性／時間流逸脱性＞について

第5節 まとめ

第6章 「ヴォイス」の観点から見る SVOle 形式の成否条件

第1節 問題提起

第2節 本稿の主張—「ヴォイス」の観点から見る SVOle 形式の成否条件

第3節 「VR 構造」と異なる「ヴォイス構文」との適合性について

3.1 調査方法と全体的な調査結果

3.2 ＜客体結果型＞の VR 構造と異なる「ヴォイス構文」との結合能力

3.3 ＜主体結果型＞の「VR 構造」と異なるヴォイス構文の結合能力

3.4 ＜補文関係＞の「VR 構造」と異なるヴォイス構文の結合能力

第4節 まとめと今後の課題

第7章 le2 の＜状態パーフェクト＞用法

第1節 問題提起——仮定条件の従属節に生起する le2

第2節 本章の主要な観点

2.1 le2 の「確認済み」のムードとは ——「非必然的結果・効力」の推定

2.2 「結果状態」の側面のみを捉える le2 の＜状態パーフェクト＞用法

2.3 「タクシス」から見る仮定従属節に現出する le2 のアスペクト的性質

2.3.1 「仮定従属節」と「時間の従属節」の連続性

2.3.2 仮定従属複文の「タクシス」と従属節における VOle の「アスペクト」

2.4 本節のまとめ

第3節 関連する諸現象から見る＜状態パーフェクト＞の le2 の特殊性と普遍性

3.1 仮定従属節に現出する VOle の語彙的アスペクト

3.1.1 「主体変化（複合）動詞」の場合

3.1.2 「状態動詞」の場合

3.1.3 「非内的限界動詞」の場合

3.1.4 「客体結果型」VR 構造の場合

3.1.5 本節のまとめ

3.2 「連体修飾節」に生起する VOle の語彙的アスペクト

3.3 <現在時>を表す時間詞と共起できる VOle の語彙的アスペクト

第4節 まとめ

第8章 「数量表現」を伴う le2 文について

第1節 「数量名形式」の目的語を伴う le2 文の成否条件とアスペクト的意味

1.1 問題提起——le2 文における「数量名目的語」の高い適合性

1.2 le2 文における「数量表現」を伴う述語形式のアスペクト

1.2.1 数量詞を伴う VO のアスペクト——<陳述性>と<自立変化性>による条件づけ

1.2.2 「数量表現」と<(動作) パーフェクト>の不適合について

1.2.3 「S+V+NUM+O+le2」の成否に関わる他の要件——動詞の意味

第2節 数量表現を伴う le2 文の「大量・充足義」について

2.1 数量表現を伴う le2 文に見られる「大量・充足」の会話の含意

2.2 数量表現を伴う le2 文における「大量・充足義」の発生のメカニズム

第3節 「時量補語」を伴う le2 文の<属性叙述>用法について

3.1 先行研究と主な問題点

3.2 「反復性運動」を表す VO による<属性叙述>の SVOTle

第4節 まとめ

終章 アスペクト研究における語用論的・認知的視点と今後の課題

第1節 アスペクト研究における語用論的・認知的アプローチの可能性

1.1 語用論的・認知的視点から見る SVOle 形式のヴォイス制約

1.2 SVOle 形式の情報構造について

1.3 まとめ

第2節 今後の課題

参考文献